

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02580

研究課題名（和文）社会や自分との関わりで古典を生かすための古文読解モデルと授業方法、評価指標の開発

研究課題名（英文）Development of classical literature reading comprehension models, lesson methods, and evaluation indicators for utilizing classics in connection with society and oneself

研究代表者

武久 康高 (TAKEHISA, YASUTAKA)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授

研究者番号：70461308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：「社会や自分との関わりの中で古典を生かすという観点が弱く、学習意欲が高まらない」といった古典教育の長年の課題を解決するため以下のことを行った。

(1) 「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解を組み込んだ「古文読解モデル」を作成した。(2) 「社会や自分との関わりの中で古典を生かす読み」を行うための授業モデル、及び評価指標を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、古文読解に関わる学力をモデル化する研究はほとんどなく、古文の学習における「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読みの位置づけも明らかにされてこなかった。そのため学力の構造に沿った適切な評価がなされず、授業方法としては一般化しなかった。よって本研究が行った読解モデルの作成は古典教育研究にとって大きな意義をもつものである。

また、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解のための具体的な授業方法や評価指標を3つの教科書教材に応じて示した点も大きな成果と言える。

研究成果の概要（英文）：In order to solve the long-standing problem of classical education, such as "the viewpoint of utilizing the classics in the relationship with society and myself is weak and the motivation for learning does not increase", the following was done.

(1) We created an "old text reading comprehension model" that incorporates reading comprehension that "makes use of classics in relation to society and oneself." (2) We have developed a lesson model and evaluation index for "reading that makes the most of the classics in relation to society and oneself."

研究分野：古典教育

キーワード：古典教育

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

高校生の古典離れの要因について、中教審の答申では「社会や自分との関わりの中で古典を生かしていくという観点の弱さ」としている。ここには、国際的な学力調査（PISA）が示す「読解力」——テキストに書かれていることを自らの知識や考え方、経験と結びつけて判断・評価する力（「読解力」のうち「熟考・評価」に分類される言語能力）の影響が指摘できる（以下「読解力」はこれを指す）。つまり答申では、学習者の意欲低下の要因を、世界標準の「読解力」の育成がなされていない点に見ているのである。

一方、高大接続システム改革の一環である大学入学共通テスト（国語）でも、従来のセンター試験と比べ、より社会との関わりの中で知識・技能を生かし、そこで働く思考力・判断力・表現力等を評価する問題となっている。ここにも、国際的な学力調査が示す「読解力」を、国語科で育成すべき学力として評価しようとする動きを読み取ることができる。

しかし、そうした大学入学共通テスト記述式国語の出題範囲から、古文と漢文のみが除かれている。本研究ではその要因を、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」といった「読解力」の内実や、そうした「読解力」を授業で育成し評価するあり方がこれまで研究されてこなかったためと考える。

このように研究開始当初は、「社会との関わりの中で古典を生かし、そこで働く能力を評価する」古典学習が必要とされていながらも、それに関わる基礎的な研究がなされていなかった。これが当時の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「社会や自分との関わりの中で古典を生かすという観点が弱く、学習意欲が高まらない」といった古典教育の長年の課題を解決することである。具体的には、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」ための古文読解モデルについて、PISA 調査が用いる読解尺度を利用して作成すると共に、そうした「読解力」を育成するための具体的な授業方法とそこでの評価指標を開発する。そのことによって高等学校の授業改善に資すると共に、古文に対する高校生の学習意欲を高めることを目的とする。

3. 研究の方法

課題 1・2・3 の順番で研究を行う。

課題 1：読解力の尺度の違いで整理した古文の読解モデルを作成する。

課題 2：教科書の古文教材を使って「読解力」の育成に向けた授業を構想し、その結果をもとに評価指標を開発する。

課題 3：課題解決活動および評価指標の有効性を実践を通じて検証・修正し、授業改善を行う。

4. 研究成果

【課題 1 について】

間瀬(2015)が設定した高校国語科の「読むこと」領域共通の読解モデルをもとに、以下のモデルを作成した。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>①読みの構えの水準:本文を読む前に、「何について書かれているか」など、読み手の既有知識を用いて推測を行うことでテキストに関わる力を問う。</p> <p>②内容理解の水準(1):本文に明示的な情報・内容を理解する力を問う。</p> <p>③内容理解の水準(2):背景知識を用いて非明示的な内容を推論・解釈し、テキスト世界を理解する力を問う。</p> <p>④表現のあり方や効果を理解する水準:テキストにおける表現方法・技法やレトリックなどの効果を分析し、評価する力を問う。</p> <p>⑤テキスト世界と現実世界の関係を問う水準(1)(2): テキスト世界における問題と読み手が存在する現実における問題とを関連させて考える力を問う。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

これまで、古文読解に関わる学力をモデル化する研究はほとんどなく、古文の学習における「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読みの位置づけも明らかにされてこなかった。そのため学力の構造に沿った評価がなされず、授業方法としては一般化しなかった。よってこうしたモデルの作成は古典教育研究にとって大きな意義をもつものである。以下、各水準を概観する。

①読みの構えの水準

古文テキストは現代とは言語も文化も異なる時代のものである。そのため文章中の明示的な情報を把握するのに相当の知識や労力を必要とし、多くの生徒はそんな労力をかけてまで古典を読みたいとは思っていない。よって予習等の段階で〈何について書かれているか〉などの情報をもとに既有知識を活性化させ、内容や展開を予測したり、自身との関わりを意識したりすることは、その後の読解に向かう構えの形成という点で意味のある活動といえる。

②内容理解の水準(1)

大学入学共通テスト等で測定される古文の読解力とは、初見の古文テキストに書かれている事実について、古語辞典を使わず、短時間で正確に把握できる力のことを指す。具体的にはテキスト中の代名詞の指示内容や単語の意味内容、各動作主を把握する力、また文章の因果関係を理

解する力などである。このように②は、テキストに書かれている事実について、テキストのみから理解する水準の読解である。

③内容理解の水準(2)

一方で③の読解は、テキストの情報と学習者が持つ背景知識とを結び付けることによる理解を指す。これは読者がその既有知識を用いることで、叙述から直接読み取れない意味内容も推論し解釈するというものであり、そこでいかなる既有知識と結び付けるかによって、読み取られる意味内容は異なる。以下、こうした③の特徴を②との比較から述べる。

前述したように②の読解は、テキストの内容を正確に理解する方向へと向かっている。一方で③は、テキストから直接読み取れない意味内容について、読者の既有知識を用いて推論し解釈するという点でテキストを深く理解する方向へも向かっている。

例えば、古文テキストの情報から活性化される背景知識が「質」「量」ともに優れ、その知識と結び付けて得られるテキスト理解が「適切さ」と共に「深さ」も持つ。これが専門家による「古文のわかり方」である。③の読解はこうした「古文のわかり方」を最終的な目標とする水準である。そのため③で用いる背景知識も、生徒の生活経験に基づくものから既習の古典知識、さらには生徒自らが探し出した古典関連資料のように、授業を通じて深化していけるようなカリキュラム編成にすることが望ましい。

多くの高校生は、古文テキストと背景知識(補助資料)を関連させて深い意味を見いだすといった思考の経験に乏しい。むしろ深いレベルの読解に資する背景知識も持ち合わせていない。よって授業準備の段階で、いかなる背景知識を資料として与え、そこからテキストの意味を見いだしていくにはどんな支援が必要か等を検討しておくことが重要である。

④表現のあり方や効果を理解する水準

しばしば和歌には、風物に対する感動が詠まれている。こうした風物への感動を詠む方法として、渡部(2009)は、(1)詠者の「感情をストレートに表す」のではなく「その場にふさわしいように、皆で共有できるように」詠み方を工夫する必要があったこと、(2)そのため和歌を詠む際には、「個人的な心情を社会化すること、社会化されたものとして感情を表現すること」が求められたと指摘している。

ここでいう(2)「個人的な心情の社会化」とは、レトリックや歌ことばなど人々に共有化された技法やイメージを用いることで、「個人的な心情」を、人々にも共感可能な言葉として紡ぎ出すことである。そのため和歌の読解で重要なのは、「個人的な心情」を探究することよりも、いかなるレトリックによって「個人的な心情」が、より効果的に、人々に共感可能なあり方で表現されているかなど、その表現のあり方や効果を分析し、評価することだといえる。

こうした和歌の読解に典型的なように、④は書き手(語り手)がその認識(例:風物への感動)を読者に語る際、どのようなレトリックや方法によって表現しているか、その効果等を分析し評価する水準である。こうした観点は散文を読む際にも重要であるため、古文の読解モデルに必要な水準だといえる。

⑤テキスト世界と現実世界の関係我问う水準

テキスト世界と現実世界とを関連付けることで、それぞれに関する考えを深めるのが⑤の読みの水準である。そこでは古文テキストの理解にとどまらず、現実世界や自己への理解・認識の深まりについても読みの水準に含めている(例えば学習指導要領の、「古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすること」(「古典探究」A読むこと、「考えの形成、共有【①】」、オ)なども⑤の水準に含めている)。

このように⑤の水準は、古文テキストと現実世界とを関連付けるところに読解のポイントがあるのだが、こうした古文テキストと現実世界とを関連させる読解は大きく二通り考えられる。

⑤-1

一つ目は、古文テキストからその意味内容や主題等を捉える(②③の読みの水準)。その上で、テキストから見いだした意味内容と現実世界とを関連付けることで、テキストを評価したり自らの考えを深めるというものである。これは〈読解-発展〉の型でいうと〈発展〉(=〈読解〉で見いだした意味内容と現実世界の問題を関連付け、自分の考え等を書く)の部分を読解モデル中に位置付けたものである。こうした読みはこれまで多くの教室で行われてきたといえる。

⑤-2

二つ目は、前述した〈読解-発展〉の型で言えば、その〈読解〉時に古文テキストと現実世界を関連付ける。そのことで古文テキストのみならず現実世界に対しても理解を深めるというものである。つまり、現実世界に関わる背景知識と結びつけてテキストの意味内容や主題等を捉え、さらに現実世界の問題をも理解しようとする読みの水準だといえる。

【課題2・3について】

授業は【課題1】の「読解モデル」に従って構想し、1年目に2単元、2年目に2単元、3年目に3単元行った。前述のように、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」「読解力」を含む「⑤テキスト世界と現実世界の関係我问う水準」は、⑤-1と⑤-2に分類できる。本研究では、⑤-1に関わるものとして高校1年生に『枕草子』「春はあけぼの」、高校2年生に『更級日記』を教材とした授業を、⑤-2に関わるものとして高校1年生に『宇治拾遺物語』「絵仏師良秀」の授業を行った。以下、概略とその成果をあげる。

⑤-1-1『枕草子』「春はあけぼの」

本単元では、(1)「春はあけぼの」章段がいかに画期的だったのかについて、同時代の表現空間に「春の段」を置いてみることによって考えること、(2)そこに見られる表現方法(特有の自然の「見方」)を一般化し、実世界で活用してみることを行った。

ここで(2)の間は次のようなものであった。

【問】あなたも清少納言に応答してみよう。日常的な風景や自然のなかに和歌や短歌、漢詩文など文学作品で描かれている情景を発見し、春の段にならって書いてみよう。

この間に対し、「春の段」の「見方」をうまく働かせ自然を捉える生徒も見られたが、大半は「和歌や漢詩の言葉を用いて枕草子風の文章を作る」ものになってしまっていた。つまり、古典テキストから特有の「見方」を読解することはできても、それを活用して表現活動まで行うためには具体例の提示など、もっと様々な手引きが必要であることが窺えた。

このように〈古典の「見方」を表現活動で生かす〉ことは生徒にとって難易度が高かった。しかし一方で、授業後の生徒たちの感想には、「春はあけぼの」の授業を受けて「〈知識を実際の文脈に活用することで新たな発見が起こる〉ことを学んだ」とか「〈あたりまえ〉は物事を見えにくくする。立ち止まってみることが重要」といったものが多かった。つまり生徒たちは、「春はあけぼの」の表現特性について概念化し、その概念を実生活の「ものの見方」と結びつけるという方法で、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」しているのである。

『枕草子』には同時代の貴族層で共有化された美意識や知識を前提とした表現が多く、それが『枕草子』の表現特性と言える。そのため授業では、「共有化された美意識や知識を利用しつつ、見慣れた風景に対して新たな美を見出す」といった『枕草子』に見られる表現方法を一般化し、現代にも当てはめてみるのが、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解として有効であると考えた。

⑤-1-2『更級日記』

本単元では、教科書教材や参考資料をもとに『更級日記』に描かれている孝標女の人生や当時の社会状況を捉え、その上で「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」ための課題を行った。

【問】現代社会や自分自身と『更級日記』とのつながりを書く。またそれがどんな問題を知ったり、自分自身や社会を見つめ直すきっかけになったか書く。

その後、(1)生徒が書いた課題、(2)同テーマで大学生が書いた課題、各数点を配布し、(1)(2)の共通点や相違点について話し合い「振り返りシート」を記入するという活動を行った。

生徒が書いた課題を分析した結果、多くの生徒は「教材から教訓や主題を見いだす」ことにより、古典と自分の知見とを結びつけていることが分かった。しかしそれは、自分自身や現代社会を見直すような問いと結びつくものではなかった。一方、同じ課題を行った大学生の文章には、自身や社会を見つめ直す問いへと結びつくものもあった。そこで両者の違いを検討してみたところ、大学生の文章では、テキストにみられる筆者の心情を個人的な問題ではなく社会的な問題として捉えている点、つまりテキストで描かれる筆者の心情や境遇を社会構造的な問題として認識し、そこから現代の私たちの問題(当然そこでは現代社会の構造的な問題と関わることになる)へとつなげている点が異なっていた。よって授業では、こうした両者の違いに気付かせるため、前述のように大学生の文章との読み比べを行わせ、振り返りシートを書かせた。結果、生徒たちは自分たちの読解に何が足りなかったのかを省察していた。

この実践から得た成果は、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解の観点として、古典教材に見られる心情や境遇を、その時代の社会的、構造的な問題として認識し、そこから現代の私たちの問題へとつなげようとする読み方が必要とされるということ、またそれは、教師が教え込むより、大学生など高校生にとって年齢的に近い人の文章のほうが関心意欲の喚起という点でより効果的であるということ、である。

⑤-2-1『宇治拾遺物語』「絵仏師良秀」

本単元では、『宇治拾遺物語』「絵仏師良秀」の内容理解を行った後、現代の価値観(結果至上主義)に関する資料を読み、その価値観への応答として「絵仏師良秀」を解釈した。そこから現代の価値観に対する語り手の認識を捉え、そうした価値観や現代社会について対象化する活動を行った。そこで生徒に出した問いは以下の通りである。

【問】資料に表れているのは現代日本にみられる風潮の一つである。こうした風潮に対して、肯定的に捉える人も否定的に捉える人もいるであろう。しかしここではそのように主観で判断するのではなく、「絵仏師良秀」を通じて考えてみたい。つまり「絵仏師良秀」を、現代日本の風潮に対して『宇治拾遺物語』の語り手が応答した結果と仮定して読解するというのである。このように仮定すると、「絵仏師良秀」の語り手は資料のような風潮をどのように考えていると言えるだろうか。肯定的か、否定的か、あるいはどちらでもないか(問題を提示してみせているなど)。また、こうした風潮に問題があるとしたら、どんなところにそれを見ているか。テキストの表現を根拠としてあなたの考えを書きなさい。

この間に対する生徒たちの解答を読み、以下のような評価指標を作成した。

- 4 「絵仏師良秀」の表現を根拠に、現代の風潮に対する語り手の認識等（肯定的・否定的・問題点を提示している等）を捉えている。なおそこでは、現代の風潮の問題点を指摘したり、現代の風潮に対する新たな見方を提示するものとして、語り手の認識を捉えていること。
- 3 「絵仏師良秀」の表現を根拠に、現代の風潮に対する語り手の認識等（肯定的・否定的・問題点を提示している等）を捉えている。
- 2 具体的な根拠（「絵仏師良秀」の表現等）はなく、両テキストの関係性（類似性等）に基づき語り手の認識等を捉えている。
- 1 具体的な根拠（「絵仏師良秀」の表現等）や両テキストの関係性（類似性）に言及することなく語り手の認識等を捉えている。

評価基準は、①現代の価値観に対する語り手の認識が捉えられているか（水準1-2）、その上で②テキストの表現を根拠としているか（水準3）、③現代の価値観についての問題や新たな視点を提示しているか（水準4）とした。

このような評価基準を設定することで、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解の一つに、〈古典の読解を通じた、現代社会における「あたりまえ」の捉え直し〉があると明確化できた。しかし一方で、こうした読解では生徒をいわゆる「評論家」にしてしまい、なかなか自分事として捉えさせることができない、という問題点も見出せた。

そこで次年度の実践では「現代の価値観」に関する資料を「能力主義」に変え、こうした「能力主義」に対する自分の考えをまとめる活動を行った。なぜなら、教材から読み取った「社会的地位のない人々を能力不足として見下す良秀の姿」は、多くの高校生の心中にも存在するのではないかと考えたからである。そこで、「バイアスの盲点」などの話を通じた〈良秀の姿を自分事として捉えさせる手立て〉を講じた後、生徒たちに〈自分の中に「良秀」はいないか？〉と振り返らせる活動を行った。結果として、ほとんどの生徒は自分事として良秀の姿を捉え、そこから自分自身に対する深い省察を行っていた。

この実践から得た成果は、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解の一つに、〈古典の読解を通じた、現代社会における「あたりまえ」の捉え直し〉があり、その評価基準を作成できた点、またその際、テキスト内容を自分事化する手立てを加えると、より深く自分自身や現代社会についての捉え直しが可能であるということが確認できた点である。

【まとめ】

本研究の成果をまとめておく。

(1) 「読解力」の尺度の違いで整理した古文読解モデルの作成。

これまで、古文読解に関わる学力をモデル化する研究はほとんどなく、古文の学習における「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読みの位置づけも明らかにされてこなかった。そのため学力の構造に沿った適切な評価がなされず、授業方法としては一般化しなかった。よってこうしたモデルの作成は古典教育研究にとって大きな意義をもつものである。

(2) 「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」「読解力」の育成に向けた授業のモデル、および評価指標の一部を作成し得たこと。

- ・エポックメイキング的な古典作品の一節が持つ表現特性を概念化して捉え（「共有化された美意識や知識を利用しつつ、見慣れた風景に対して新たな美を見出す」）、そうした見方を使って現代社会を見直すという読解。

- ・古典教材に見られる心情や境遇を、その時代の社会的・構造的な問題として捉え、そうした社会構造的な問題として現代社会や自分自身を見直そうとする読解。

- ・現実世界の問題に対する応答の結果として古典教材を捉え、その上で、そうした応答をする古文教材について、またそうした現実世界の問題について捉え直しを行うという読解。またそこでの評価基準は、①現代の価値観に対する語り手の認識が捉えられているか（水準1-2）、その上で②テキストの表現を根拠としているか（水準3）、③現代の価値観についての問題や新たな視点を提示しているか（水準4）というものである。

以上のように、「社会や自分との関わりの中で古典を生かす」読解の具体的な観点や評価指標を教科書教材に応じて示した点も大きな成果と言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 武久康高	4. 巻 第68巻7号
2. 論文標題 「明かりて」か「赤りて」か 「春はあけぼの」の表現方法を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 61号
2. 論文標題 古典作品を教材とした「深い学び」の実践をめざして 『枕草子』『春はあけぼの』の授業実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語教育研究	6. 最初と最後の頁 56-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 1
2. 論文標題 「言葉による見方・考え方」を働かせる古典学習 『枕草子』『春はあけぼの』章段の表現特性を探究する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知大学学校教育研究	6. 最初と最後の頁 165-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 武久康高	4. 巻 3
2. 論文標題 「言葉への自覚を高める」和歌の学習指導（中学3年生）：Yチャートを利用して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知大学学校教育研究	6. 最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 古典作品を教材とした「深い学び」の実践をめざして 『枕草子』『春はあけぼの』の授業実践
3. 学会等名 第60回広島大学教育学部国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 『宇治拾遺物語』『絵仏師良秀』を読む 情報を関連づけて古典教材を読む
3. 学会等名 日本文学協会 第38回研究発表大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 社会や自分との関わりで古典を生かすための古文読解モデルと授業化についての研究
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 武久康高
2. 発表標題 社会や自分との関わりで古典を生かすための古文読解モデルと授業化についての研究（2）
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	吉田 茂樹 (YOSHIDA SHIGEKI) (20737837)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授 (16401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------